慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	台湾における民俗的健康観の医療人類学的研究 : ライフヒストリーと諸宗教の交渉を中心として
Sub Title	
Author	藤野, 陽平(Fujino, Yohei)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.156- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成16年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

한경혜, 1998, 「중년기 남성의 역할 중요도와 일/가족 갈등」『가족과 문화』10(2): 93-113.
稲葉昭英, 2001, 「計量社会学的アプローチ」野々山久也・清水弘昭編『家族社会学の分析視——社会学的アプローチの応用と課題』ミネルヴァ書房, 365-84.
金井篤子, 2002, 「ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスの影響に関する心理的プロセスの検討」『産業・組織心理学研究』15(2): 107-22.
강란혜, 2000, 「한국과 일본 아버지의 자녀양육 행동의 비교」『한국아동학회지』38(7): 153-165.
이숙현・서혜영, 2002, 「기혼 남성의 삶의 질에 관한 연구」『가족과 문화』14(2): 3-30.
内閣府, 2002, 「平成14年度 男女共同参画社会の形成の状況に関する年次報告」『男女共同参画白書——男女共同参画の現状と施策(http://www.gender.go.jp/whitepaper/h15/summary/danjyo/html/honpen/index.html 2004.11.24).

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程

台湾における民俗的健康観の医療人類学的研究

——ライフヒストリーと諸宗教の交渉を中心として——

藤 野 陽 平*

デカルト的心身二元論的機械論的身体観に基礎を置くために生物医学的健康は「病がない状態」と考えられてきた。実際にこのような定義の元，生物医学は大きく発展したのであるが，患者をものとしか見ない，患者の病いを個性を持った人格との関係でみない［山口，1990: 35］というような状況に陥ることとなる。以上の議論を踏まえた上で人類にとっての健康の意味を考えるべき医療人類学においても概ねこの傾向で理解されてきた。つまり，病いの研究さえしていればその対義語である健康観も明らかになるのだと。しかし，民族や地域によって病いが異なると証明してきた医療人類学が紋切り型に健康を「病いがない状態」と考えるわけにはいかないであろう。民俗的な健康観は様々であるはずである。そこで，本研究では台湾人社会における健康観を医療と宗教の交わる地点に注目して考察する。特に近代的健康観が流入する以前から台湾の宗教界でそれに近い概念として扱われてきた「平安(ping-an)」が現代社会においていかに生物医学の知識と交渉しながら構築されているかについて研究を進めることとする。またそのような宗教や医療などの知識の交渉によって構築されている民俗的健康観は臨床リアリティの問題であるのであくまでも個人的な観点から考察する必要があるためにライフヒストリー研究を方法論としてとる。

以上の問題意識から2004年11月から12月にかけて1カ月間にわたり台湾においてフィールドワークを行った。内容は文献収集とインタビュー調査，キリスト教・道教の儀礼の参与観察である。文献収集は国立中央研究院民族学研究所（台北市），国立台湾大学（台北市），国立成功大学（台南市），台南市立図書館等の図書館で文献複写を，台北市，台南市で書籍購入を行った。特に台湾におけるキリスト教，医療衛生史，王爺信仰，宗教の市場経済化等に関する文献を中心に収集した。これらの資料を利用して研究ノート「癒しの民俗宗教としての台湾キリスト教—真耶穌教会を事例として—」（『日本台湾学会報』第7号2005年）と学会発表「台湾における民俗的健康観—小琉球の王爺祭祀を事例として—」（文化人類学会第39回研究大会2005年）を行った。

インタビュー調査は病いが癒される過程とライフヒストリーを中心に採集した。本報告では紙幅の関

係上代表的な一点を紹介する。

K 氏（嘉義市）

「私が 7 歳のころ真耶蘇教会で洗礼を受けました。それまでは家族で仏教徒でした。入信のきっかけは兄が肺病の肋膜炎になったことです。医者に通っていたのですが薬のない時代でやせ細り死にかけていました。そのころ母が路上で見知らぬ女性に「イエスを信じて祈れば治る」と言われ，祈ってみたところ，その晩からそれまで眠っていても 15 分ごとに起きて苦しんでいた兄が一晩中ぐっすり眠れるようになり，良くなりました。それでその女性の言うことを信じたのですが，連絡先を聞き忘れていました。そこで母は嘉義中を歩き回り，その女性を探し回りました。教会の前を通りかかった時，その女性が掃除をしていいました。そこで真耶蘇教会に通うことになり，一家で信者になり「平安」になりました。今でも兄はとても元気です。

兄は薬を飲まないで「平安」になりました。「平安」とは体が元気，病いが癒されるということです。それまでの生活は悪魔の妨げがありました。姉は鬼を見たことがあるといっています。鬼もまた霊の一つで，その人が鬼とはこういうものだと想像している姿をして現れるのです。たとえば鬼には角があると思っているとそのような姿で出てきます。「願主耶蘇常与你同在（願わくは主イエスキリストが汝らと共にあるように）」という祝福の文句がありますがこれが「平安」のことです。イエスが共にいれば心が安らかになるし，体が元気になるのです。体が「平安」になるのは神が行うこと。奇跡とは神が行う力のことで，医者が治せないような病気が治ったのならばそれは神の力を得たということで，つまり奇跡が起きたということなのです。

私が伝道者になった理由は 13 歳のころ悪性のマラリアになったことです。そのころは日本時代で薬もなく私は息絶えてしまった。兄二人は医者であったので両親にもうだめだから棺桶を作ったほうがよいとすすめましたが，母はあきらめきれず息をしていない私を抱きしめながら一時間ほど祈り続けました。しかし，それでも息を吹き返さないので，もし息子が生き返るならば伝道者にしますと誓いを立てた。その時ちょうど私は息を吹き返しました。私は意識がなかったので何があったのか全く記憶がありませんでしたが，のどがとても渇いていたので水を 2 杯飲みました。それ以来病気は治ってしまいました。高校を卒業したときに母は誓いを立てたのだから伝道者にならなくてはいけないと私を伝道者になるように説得しました。

長男が生まれるときに逆子でした。医者はあきらめており，生まれたとき既に色が黒くなっていて，息もしていなかったので産婆はもうだめだと考えていたようですが，祈りをやめませんでした。その結果息子は泣き出し息をしました。その時の産婆は私の祈りをみて「あなたの神は偉い神だ」と認めました。長男はいまでも元気で南台中教会の責任者をしています。」

参与観察についてはキリスト教の儀礼や教義を中心に「癒しの民俗宗教としての台湾キリスト教—真耶蘇教会を事例として—」と「民俗宗教としての台湾キリスト教—真耶蘇教会を事例として—」(IAHR, 2005) にて報告した。本研究の要旨は以下のとおり。

「台湾におけるキリスト教徒数は道教につぎ，仏教をも上回る。しかし，台湾のキリスト教研究は宣教史として行われることが多く，台湾研究としては未発達の分野である。本稿ではキリスト教研究を台湾研究に位置づけようという試みである。そのために台湾の生活者が社会の動態的なコンテクストの中で

構築していくことに注目するキリスト教研究を目指し，そこに民俗的な視点を導入し，キリスト教を教団・教義などだけを扱うのではなく，それらの影響を受けた上で生活者が宗教を受容・実践・再構築していく際の論理としての民俗宗教ととらえることとする。事例として真耶蘇教会を取り上げ，歴史，教義，礼拝，奇跡体験の順に論じていく。なお，本教会は大陸発祥であるが戦後台湾を中心に発展した教会で台湾の民俗宗教としてのキリスト教を考えるうえで適切な事例である。最終的に上からの面としての歴史，教義，礼拝と生活者が受容している面としての癒しに注目して台湾に暮らす生活者が日常的実践としてキリスト教を構築していく様を描き出した。」

上記以外にも本研究の目的に照らして以下の論文を発表した。要旨を記す。

「日本統治下台湾における対日感情―漢族と原住民の比較から―」

「本稿は日本統治下台湾における対日感情の整理と分析を行うことを目指すものである。これまでも日本統治下における台湾の研究は多くなされてきた。しかし，台湾には大きく分けて漢族と原住民が暮らしている。さらに細かく分ければ，漢族は福建系と客家，原住民はタイヤル，サイシャット，アミ，ヤミなど９つの民族に分けることができるとされ，それぞれ影響を及ぼしあいながらも独特な生活習慣を持っている。しかし，これまでの研究ではそれらを混同し，一つの「台湾人」がいるような論じ方をするものや，ある一つの民族に限定するものが多く，多民族「地域」である台湾の状況を考慮した記述はほとんどみられないようである。そこで，本稿では漢族と原住民との比較を歴史的に追いながら論を進めた。具体的には漢民族は抗日運動前期（武力闘争）・後期（政治運動）・皇民化運動政策下，原住民は理蕃事業の推移・霧社事件・皇民化運動政策下と分類することで，それぞれの対日感情の変化を追った。」

「台湾の地方祭祀にみる民俗的健康観―小琉球における王爺の迎王祭典の事例から―」[1)]

「これまで文化人類学では健康を研究対象としながらも，中心的な研究課題とはしてこなかった。これには健康という概念が病いの対概念であるという生物医学的な定義を紋切り型に世界中の文化に当てはめた結果である。しかし，健康概念が近代化と共に世界中に流入する以前から健康に類する概念は存在していたはずであり，本研究ではそのような概念として台湾における「平安」を取り上げる。事例として台湾の小琉球における王爺という神を迎え，悪しきものを祓ってもらい，天上に送り返すという迎王祭典を取り上げ，参加者らが儀礼中に行っている行為を分析することで平安の意味内容を民俗学・人類学の知識を利用して解釈することを目的とする。結論として平安の重層性を明らかにし，無事の意味を基本とし，その他に各自の問題を付け加えていくという構造を明らかにした。」

注

1) 上述の学会発表「台湾における民俗的健康観―小琉球の王爺祭祀を事例として―」（文化人類学会第 39 回研究大会 2005 年）は本稿を修正したものである。

引用文献

山口昌男，　1990 『病いの宇宙誌』論風社
藤野陽平，　2005a 「日本統治下台湾における対日感情―漢族と原住民の比較から―」『民俗文化研究』第 5 号（民俗

文化研究所）
———，2005b「台湾の地方祭祀にみる民俗的健康観—小琉球における王爺の迎王祭典の事例から—」『人間と社会の探求』第58号（慶應義塾大学社会学研究科紀要）
———，2006「癒しの民俗宗教としての台湾キリスト教—真耶穌教会を事例として—」『日本台湾学会報』第7号（日本台湾学会）

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

近代日本における「読む」行為と人間形成
——図書館における活動を視点として——

山　梨　あ　や*

本研究の概要

本研究の目的は，図書館における活動を視点として，女性が読書行為に参入する過程とその実態を明らかにすることである。平成16年度は，長野県飯田市における婦人文庫の設立過程と活動の変遷を明らかにすることにより，女性の読書行為への参入のあり方を検討する作業を行った。2004年9月18日に開催された日本社会教育学会においては，飯伊婦人文庫の設立から1960年代までを対象として，婦人文庫の活動の展開および当時の女性にとっての読書行為の意味について発表し，『日本社会教育学会紀要』第41号（2005年）に掲載されることとなった。以下，本年度の研究成果として上記学会の発表および論文の内容を要約する。

はじめに

長野県では，敗戦直後から地域の「民主化」を目指し，青年団や婦人会による学習・文化運動や公民館運動が展開された。読書(会)活動は学習活動の代表的なものであり，長野県では青年団や地域婦人会を主な担い手とする「読書会連絡会」とPTAを組織母体とする「PTA母親文庫」の二系統の読書運動が展開された。本研究で検討する飯伊婦人文庫は両者の特徴を併せ持ちながらも，いずれの読書運動とも距離を保ちつつ独自の読書運動を展開しており，本研究で飯伊婦人文庫に注目する理由もここにある。

本研究では婦人文庫発行の文集『かざこし』(1959～71年)，『読書についての文集』(1962年～）を分析することにより，当時の女性の視点から読書という行為がどのように捉えられ，営まれていたのかを明らかにしていく。

1. 飯伊婦人文庫の設立

飯伊婦人文庫は，青年団，地域婦人会の活動，さらに公民館運動が結びついた結果設立されたものである。青年団のメンバーは公民館に働きかけて下伊那郡図書館協議会を結成させ，県立図書館および飯田市立図書館から配本を受けることに成功した。この結果，1957年に現在の飯伊婦人文庫の原型となる飯伊母親文庫および飯田婦人文庫が設立された。

両文庫の活動の方針を示し，実質的な運営の指導に当たったのが，1956年に竜丘村教育長・公民館